

野球好き、私が幼かった頃の記憶にいる父親の姿だ。父親は野球のシーズンになると毎日早目に帰宅し、食事や風呂をすませ、テレビの前の父の特等席のソファーにどっかり腰をおろし、ウーロンハイとメガホン片手に野球にくぎ付けになっていた。私は父親のひざの上に乗る、一緒にあって見ていた。もちろんルールなんて理解できない。おまけに見たいテレビ番組も見れないし、父は野球に夢中でかまったり遊んだりしてくれないので、いつも退屈な思いをしていた。当時の私からしたらただ、グルグル円を走って見えて何が楽しいのか、大勢の人がなぜこんなにも夢中になるのかが見当もつかなかった。

時は流れ、私は小学三年生になった。桜に緑が混じりつつあったある晴れた日に、父は古びたグローブとソフトボールを持ってきて私に初めて、

「キャッチボールせんけ。」

と、言った。少しの恐怖心はあったが、父と遊べるのが嬉しくてやってみることにした。いくぞ、と言ってテレビで見るとは違うゆっくりなモーションでボールを放った父は、いつもより嬉しそうだった。しかし、ゆっくり放たれたはずのボールは私にとってひどく速く見えた。動揺して私はグローブを出すのが少し遅れてしまった。ボールはグローブを弾きコロコロと転がる。悔しくてすぐボールを拾って返球するが、私の小さな手から放たれたボールは変な方向に飛び、父のグローブに収まるには程遠い場所に落ちた。私は嫌になって逃げだしたくなったが、

「もう一回。力まず、最後までボールを見る。」

と、あまりにも真剣な父の声に、もう一度やらざるを得なくなった。そして父はボールを投げた。

「最後まで見る」そうすることで私はボールの位置とグローブの位置を合わせた。ぽすん、という音とともにグローブにはボールが収まっていた。——やった！私は続いてボールを投げた。力まない」その思いを乗せたボールは、スツと父のグローブの元に伸びていった。私はこみあげて嬉しさを抑えることができず、跳びはねて父に抱きついた。その後私は夢中になって夕暮れまでキャッチボールをした。私は楽しかった、と呟き繋いだ手から父を見上げた。父は嬉しそうだった。それが父との最後の思い出となった。

数日後、父は倒れた。病名はくも膜下出血。父の目にもう私や家族が映し出されることは二度となく、帰らぬ人となった。その出来事は嵐のようにドタバタと家中を荒らしていった。私はただ数日前のキャッチボールをしている元気な父を思い出しては悲しくなり、その思い出は辛いものとなった。

時は流れ、私は高校生になった。ドキドキの学校生活初日、早く着きすぎたな、と思い階段を上った。階上に着いた瞬間、坊主頭の男子が並び、*「野球マネ募集」*と書かれた紙をもって元気よく挨拶していた。なんだか心に残るものがあつたが、私は脳裏に悲しい思い出がよぎりその場から逃げてしまった。なんとなく、部活は茶道部にしようと仮入部活を出した。だが、どこか自分の中にモヤモヤとしたものがあつた。これでいいのか、と。私はこれが自分のベストな選択だ

と信じて考えるのを止めてしまった。

数日して、担任から本入部活の紙が配られた。私はなぜか茶道部、と記入せず白紙のまま放課後を迎えてしまった。ふと、外を見るとグラウンドで野球部がキャッチボールをしている。声を出し元気に動いていた。それがなんだか楽しそうでつい見入ってしまった。私はふと思いついた。父とキャッチボールをしたことを。ただ楽しかったのだ。父もまた野球が好きで笑顔であった。父が好きな野球を知りたいと思った瞬間、私は本入部活の紙に「野球部」と記入していた。急がないと、と私は廊下を走りだした。心は晴れやかでワクワクしていた。

本入部からスタートした私は少し出遅れた。ルールは難しく未だに迷うこともあるが野球がこんなに楽しくておもしろいことが知れた。父のことを少しでも理解できたかな、と考える時間も多くなった。厳しいことも辛いこともあるけれど、それを通じて強くなっている自分が嬉しくなる。野球と父が繋がっていて父から学ぶようだ。私は今、父とキャッチボールをしている。それは父と私を結ぶ大切な心の架け橋だろう。